

福島原発をゆく(4)

午後からは今回の福島調査の「目玉」である第一原発構内の視察だ。「福島復興本社5年の軌跡」、1号機から4号機の状況や写真の構内配置図などの説明のあと、視察用の大型バスに乗り込んだ。

バスは富岡町の(旧)エネルギー館から、北に向けて第一原発へと進む。広大な第一原発敷地に入ると工事現場が見えてきた。中間貯蔵施設建設に向けた工事のようだ。とにかく広い。

「入退域管理棟」で厳重なチェックを何回も受け、着替えなどの部屋に入る。長靴、帽子、マスク、手袋、ベスト、ヘルメットを装備した。

ベストのポケットには、放射能の線量計も入れた。これまでの「重装備」から、最近になって「軽装備」へと変わったとのことだ。

再び緊張気味にバスに乗り込んだ。バスは多核種除去設備(既設・増設 ALPS)や数多くの汚染水の貯蔵タンクなどの横を通り、1号機から4号機を概観できる場所に行き、ここで降車した。原発事故により大きく破壊され、一部修復された原子炉建屋などを間近に見ることができた。このなかの原子炉が爆発し、甚大な被害を出し続けている建屋を眺めていると、なんだか怒りと悲しみがこみ上げてきた。地下水バイパス設備や陸側凍土遮水壁設備などを見学。

このあと1号機と2号機の間を通り海側に抜ける。そのとき線量計の値がぐんと上がり、今なお活動を続ける原発を身をもって感じた。津波が押し寄せた海側の物揚げ場などを見ながら、5号機・6号機を通る。雑固体廃棄物焼却設備、固体廃棄物貯蔵庫、免震重要棟を横に見ながら、入退域管理棟に戻る。免震重要棟は原発事故当時、吉田昌郎所長をはじめ、多くの作業員が必死に事故処理にあたった場所だ。これがないと事故処理は困難だったという。

入退域管理棟近くに、約1200名が利用できる「大型休憩所」がつくられ、ようやく労働環境も改善されてきたようだ。多くの作業員が黙々と働く姿が印象的だった。

写真は調査メンバーの加藤正文さんの撮影による。「代表撮影」しか許されず、私は原発構内では撮影できなかった。写真上はぎっしり並ぶ汚染水のタンク群、下は壊れた原子炉建屋を眺めるメンバー。いちばん前で呆然と眺めているのが私。

(2018年7月2日)

